八幡太郎

楠山正雄

一

日本のむかしの武士で一番強かったのは源氏の武士でございます。その源氏の先祖で、一番えらい大将といえば八幡太郎でございます。むかし源氏の武士は戦に出る時、氏神さまの八幡大神のお名を唱えるといっしょに、きっと先祖の八幡太郎を思い出して、いつも自分の向かって行く先々には、八幡太郎の霊が守っていてくれると思って、戦に励んだものでした。

八幡太郎は源頼義という大将の長男で、おとうさんの頼義が、ある晩八幡大神からりっぱな宝剣を

頂いたという夢を見ると、間もなく八幡太郎が生まれました。七つの年に石清水八幡のお宮で元服して、八幡太郎義家と名のりました。

義家は子供の時から弓がうまくって、もう十二、三という年にはたいていの武士の引けないような上手な弓を引いて、射れば必ず当たるという不思議なわざをもっていました。

ある時清原武則というこれも弓の名人で名高かった人が、義家のほんとうの弓勢を知りたがって、丈夫な鎧を三重ねまで木の上にかけて、義家に射させました。

義家はそこらにある弓に矢をつがえて、無造作に放し

ますと、鎧を三枚とおして、後ろに五寸も鏃が出ていました。

二

大きくなって、義家はおとうさんの頼義について、奥州の安倍貞任、宗任という兄弟の荒えびすを征伐に行きました。その戦は九年もつづいて、その間にはずいぶんはげしい大雪に悩んだり、兵糧がなくなって危うく餓え死にをしかけたり、一時は敵の勢いがたいそう強くって、味方は残らず討ち死にと覚悟をき

めたりしたこともありましたが、その度ごとにいつも義家が、不思議な智恵と勇気と、それから神様のような弓矢の技で敵を退けて、九分九厘まで負け戦にきまったものを、もり返して味方の勝利にしました。それで戦えば戦うたんびに八幡太郎の名が高くなりました。さすがの荒えびすもふるえ上がって、しまいには八幡太郎の名を聞いただけで逃げ出すようになりました。

けれども、強いばかりが武士ではありません。八幡太郎が心のやさしい、神様のように情けの深い人だということは、敵すらも感じて、慕わしく思うよ

うになりました。

それはもう長(なが)い長(なが)い九年(ねん)の戦(たたか)いもそろそろおしまいになろうという時分(じぶん)のことでした。ある日はげしい戦(いくさ)のあとで、義家(よしいえ)は敵(てき)の大将(たいしょう)の貞任(さだとう)とただ二人(ふたり)、一騎打(きう)ちの勝負(しょうぶ)をいたしました。そのうちとうとう貞任(さだとう)がかなわなくなって、馬(うま)の首(くび)を向(む)けかえして、逃(に)げて行こうとしますと、義家(よしいえ)は後(うし)ろから大きな声(こえ)で、

「衣(ころも)のたては
ほころびにけり。」

と和歌(わか)の下(しも)の句(く)をうたいかけました。すると貞任(さだとう)も逃(に)げながら振(ふ)り向(む)いて、

「年を経し
糸の乱れの
苦しさに。」

とすぐに上の句をつけました。これは戦の場所がちょうど衣川のそばの「衣の館」という所でしたから、義家が貞任に、

「お前の衣ももうほころびた。お前の運ももう末だ。」

とあざけったのでございます。すると貞任も負けずに、

「それはなにしろ長年の戦で、衣の糸もばらばらに

ほごれてきたからしかたがない。」

とよみかえしたのでした。

これで義家(よしいえ)もいかにも貞任(さだとう)がかわいそうになって、その日はそのまま見逃(みのが)してかえしてやりました。

けれども一度(ど)は逃(に)がしてやっても、いったい運(うん)の尽(つ)きたものはどうにもならないので、間(ま)もなく貞任(さだとう)は殺(ころ)され、弟(おとうと)の宗任(むねとう)も生(い)け捕(ど)りになって、奥州(おうしゅう)の荒(あら)えびすは残(のこ)らず滅(ほろ)びてしまいました。そこで頼義(よりよし)と義家(よしいえ)の二人(ふたり)は九年(ねん)の苦(くる)しい戦(いくさ)の後(のち)、生(い)け捕(ど)りの敵(てき)を引(ひ)き連(つ)れて、めでたく京都(きょうと)へ凱旋(がいせん)いたしました。

三

京都へ帰って後、敵の大将の宗任はすぐに首を切られるはずでしたけれど、義家は、

「戦がすんでしまえば、もう敵も味方もない。むだに人の命を絶つには及ばない。」

と思いました。そこで天子さまに願って、自分が御褒美を頂く代わりに、宗任はじめ敵のとりこを残らず許してやりました。その中で宗任はそのまま都に止まって、義家の家来になりたいというので、そばに置いて使うことにしました。

宗任はいったん義家に命を助けてもらったので、たいそうありがたいと思って、義家の徳になつくようになったのですが、元々人を恨む心の深い荒えびすのことですから、自分の一家を滅ぼした義家をやはり憎らしく思う心がぬけません。それでいつか折があったら、殺して敵を討ってやろうとねらっておりました。けれども義家の方はいっこう平気で、昔から使いなれた家来同様宗任をかわいがって、どこへ行くにも、「宗任、宗任。」とお供につれて歩いていました。

するとある晩のことでした。義家はたった一人宗任

をお供につれて、ある人の家をたずねに行って、夜おそく帰って来ました。宗任は牛車を追いながら、今夜こそ義家を殺してやろうと思いました。そこで懐からそろそろ刀を抜きかけて、そっと車の中をのぞきますと、中では義家がなんにも胸にわだかまりのない顔をして、すやすや眠っていました。宗任はその時、

「敵のわたしにただ一人供をさせて、少しも疑う気色も見せない。どこまで心のひろい、りっぱな人だろう。」

と感心して、抜きかけた刀を引っこめてしまいま

した。そしてそれからはまったく義家になついて、一生そむきませんでした。

それからまたある時、義家はいつものとおり宗任を一人お供につれて、大臣の藤原頼通という人のお屋敷へよばれて行ったことがありました。頼通は義家にくわしく奥州の戦争の話をさせて聞きながら、おもしろいので夜の更けるのも忘れていました。ちょうどその時、このお屋敷にその時分学者で名高かった大江匡房という人が来合わせていて、やはり感心して聞いていましたが、帰りがけに一言、

「あの義家はりっぱな大将だが、惜しいことに戦の

学問ができていない。」

とひとり言のようにいいました。するとそれを玄関先で待っていた宗任が小耳にはさんで、後で義家に、

「匡房がこんなことをいっていました。何もわからない学者のくせに、生意気ではありませんか。」

といって、怒っていました。けれども、義家は笑って、

「いや、それはあの人のいう方がほんとうだ。」

といって、そのあくる日改めて匡房のところへ出かけて行って、ていねいにたのんで、戦の学問を教え

てもらうことにしました。

四

するうちまた奥州(おうしゅう)に戦争(せんそう)がはじまりました。それは義家(よしいえ)が鎮守府(ちんじゅふ)将軍(しょうぐん)になって奥州(おうしゅう)に下(くだ)って居(お)りますと、清原真衡(きよはらのさねひら)、家衡(いえひら)という荒(あら)えびすの兄弟(きょうだい)の内輪(うちわ)けんかからはじまって、しまいには、家衡(いえひら)がおじの武衡(たけひら)を語(かた)らって、義家(よしいえ)に向(む)かって来(き)たのでした。

そこで義家(よしいえ)は身方(みかた)の軍勢(ぐんぜい)を率(ひき)いて、こんども餓(う)えと寒(さむ)さになやみながら、三年(ねん)の間(あいだ)わき目(め)もふらずに戦(たたか)

いました。

この戦（いくさ）の間（あいだ）のことでした。ある日（ひ）義家（よしいえ）が何気（なにげ）なく野原（のはら）を通（とお）って行きますと、草（くさ）の深（ふか）く茂（しげ）った中から、出（だ）し抜（ぬ）けにばらばらとがんがたくさん飛（と）び立（た）ちました。義家（よしいえ）はこれを見（み）てしばらく考（かんが）えていましたが、

「野（の）にがんが乱（みだ）れて立（た）ったところをみると、きっと伏兵（ふくへい）があるのだ。それ、こちらから先（さき）へかかれ。」

といいつけて、そこらの野原（のはら）を狩（か）りたてますと、案（あん）の定（じょう）たくさんの伏兵（ふくへい）が草（くさ）の中にかくれていました。そしてみんなみつかって殺（ころ）されてしまいました。その時義家（ときよしいえ）は家来（けらい）たちに向（む）かって、

「がんの乱れて立つ時は伏兵があるしるしだということは、匡房の卿から教わった兵学の本にあることだ。お陰で危ないところを助かった。だから学問はしなければならないものだ。」

といいました。

こんどの戦は前の時に劣らず随分苦しい戦争でしたけれど、三年めにはすっかり片付いてしまって、義家はまた久し振りで都へ帰ることになりました。ちょうど春のことで、奥州を出て海伝いに常陸の国へ入ろうとして、国境の勿来の関にかかりますと、みごとな山桜がいっぱい咲いて、風も吹かないのには

らはらと鎧の袖にちりかかりました。義家はその時馬の上でふり返って桜の花を仰ぎながら、

「吹く風を
なこその関と
思えども
道も狭に散る
山桜かな。」

という歌を詠みました。

これは「風が中へ吹きこんで来てはいけないぞといって立てた関所であるはずなのに、どうしてこんなに通り道もふさがるほど、山桜の花がたくさん散り

かかるのであろう。」といって、桜の散るのを惜しんだのです。

五

八幡太郎の名はその後ますます高くなって、しまいには鳥けだものまでその名を聞いて恐れたといわれるほどになりました。

ある時、天子さまの御所に毎晩不思議な魔物が現れて、その現れる時刻になると、天子さまは急にお熱が出て、おこりというはげしい病をお病みになり

ました。そこで、八幡太郎においいつけになって、御所の警固をさせることになりました。義家は仰せをうけると、すぐ鎧直垂に身を固めて、弓矢をもって御所のお庭のまん中に立って見張りをしていました。真夜中すぎになって、いつものとおり天子さまがおこりをお病みになる刻限になりました。義家はまっくらなお庭の上につっ立って、魔物の来ると思われる方角をきっとにらみつけながら、弓絃をぴん、ぴん、ぴんと三度まで鳴らしました。そして、

「八幡太郎義家。」

と大きな声で名のりました。するとそれなりすっと

魔物(まもの)は消(き)えて、天子(てんし)さまの御病気(ごびょうき)はきれいになおってしまいました。

　またある時(とき)野原(のはら)へ狩(かり)に出かけますと、向(む)こうからきつねが一匹(ぴき)出て来(き)ました。義家(よしいえ)はそれを見(み)て、あんな小(ちい)さなけものに矢(や)をあてるのもむごたらしい、おどしてやろうと思(おも)って、弓(ゆみ)に矢(や)をつがえて、わざときつねの目の前(まえ)の地(じ)びたに向(む)けて放(はな)しますと、矢(や)は絃(つる)をはなれて、やがてきつねのまん前(まえ)にひょいと立(た)ちました。するときつねはそれだけでもう目をまわして、くるりとひっくりかえると思(おも)うと、そのまま倒(たお)れて死(し)んでしまいました。

またある時義家が時の大臣の御堂殿のお屋敷へよばれて行きますと、ちょうどそこには解脱寺の観修というえらい坊さんや、安倍晴明という名高い陰陽師や、忠明という名人の医者が来合わせていました。その時ちょうど奈良から初もののうりを献上して来ました。珍しい大きなうりだからというので、そのままお盆にのせて四人のお客の前に出しました。するとまず安倍晴明がそのうりを手にのせて、

「ほう、これは珍しいうりだ。」

といって、眺めていました。そして、

「しかしどうも、この中には悪いものが入っているよ

うです。」

といいました。すると御堂殿は解脱寺の坊さんに向かって、

「ではお上人、一つ加持をしてみて下さい。」

といいました。坊さんが承知して珠数をつまぐりながら、何か祈りはじめますと、不思議にもうりがむくむくと動き出しました。さてこそ怪しいうりだというので、お医者の忠明が針療治に使う針を出して、

「どれ、わたしが止めてやりましょう。」

といいながら、うりの胴中に二所まで針を打ちますと、なるほどそのままうりは動かなくなってしまい

ました。そこで一ばんおしまいに義家が、短刀をぬいて、

「ではわたしが割って見ましょう。」

といいながらうりを割りますと、中には案の定小蛇が一匹入っていました。見ると忠明のうった針が、ちゃんと両方の目にささっていました。

そして義家がつい無造作に切り込んだ短刀は、りっぱに蛇の首と胴を切り離していました。

御堂殿は感心して、

「なるほどその道に名高い名人たちのすることは、さすがに違ったものだ。」

といいました。

六

八幡太郎は七十近くまで長生きをして、六、七代の天子さまにお仕え申し上げました。ですからその一代の間には、りっぱな武勇の話は数しれずあって、それがみんな後の武士たちのお手本になったのでした。

底本：「日本の英雄伝説」講談社学術文庫、講談社
　　１９８３（昭和58）年６月10日第1刷発行
入力：鈴木厚司
校正：大久保ゆう
２００３年９月29日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。